

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

ハゼノキ (*Toxicodendron succedaneum* (L.) Kuntze) と ヤマハゼ (*Toxicodendron sylvestri* (Sieb. et Zucc.) Kuntze)

小野幸菜 (東興ジオテック株式会社/日本樹木種子研究所)
sachinaono@toko-geo.co.jp



秋, 里山の林縁に赤く色づいた複葉の樹木が目にとまるが, 関東以西の地域ではハゼノキやヤマハゼであることが多い。紅葉が美しく, 庭木として植栽されたり, 盆栽として利用されることもある。

両種ともにウルシ科ウルシ属であり, ハゼノキは高さ6~10 mの落葉高木で, 葉は奇数羽状複葉, 長さ20~40 cm, 無毛の葉柄の先に9~15枚の小葉がつく。葉の裏面脈状に点状の毛が散生するが, じきに両面無毛となる。本州(関東南部以西)・四国・九州・小笠原・琉球の常緑林内に生え, 木蠟の原料としてかつては広く栽培された。一方, ヤマハゼは高さ5~6 mの落葉小高木で大きいものは10 mにもなる。葉は奇数羽状複葉で9~11枚の小葉からなり, 長さはハゼノキとほぼ同じであるが, 葉柄には褐色の軟毛がやや密に生え, 葉の両面は毛が散生し, 裏面脈上にはあらい毛がやや密に生える点がハゼノキとは異なる。本州(関東以西)・四国・九州の山地の林内に生える³⁾。

両種ともに雌雄異株で, 5~6月ごろに円錐花序をつけ, 果実は核果で, やや扁平な球形であり, ハゼノキは直径9~13 mmの黄白色, ヤマハゼは直径7~8 mmで黄褐色に熟す³⁾。中果皮は厚い蠟質で縦筋があり繊維状で, 種子にこびりつきはがれにくい。10~11月に成熟するが落下せず, 長期間樹上に着生している²⁾。結実には豊凶があり, 個体によって充実種子の割合に差があることから, 実入りを確認しながら採種木を選定することが望ましい。

RSセンター(東興ジオテック株式会社の木本種子貯蔵施設)で貯蔵した種子の測定データは, 果肉付の場合, ハゼノキの単位粒数は7.6~9.7粒/g, 平均重量は103.1~131.6 mg/粒, 一方, ヤマハゼの単位粒数は12.3~16.9粒/g, 平均重量は59.2~81.3 mg/粒であった。また, 種子のみの場合, ハゼノキの単位粒数は13.9~21.9粒/g, 平均重量は

46.2~73.0 mg/粒, 一方, ヤマハゼの単位粒数は18.8~25.1粒/g, 平均重量は39.9~53.1 mg/粒であった。

これらは硬実休眠種子で, 種皮が硬く堅固であり発芽に必要な水分や酸素の透過が妨げられ発芽できないタイプである。早期発芽力検定法¹⁾で品質検査する場合は, 濃硫酸を用いて種皮を薄層化し, 高酸素分圧下で置床することで, 播種後5~7日で発芽率を調査することができる。種子内部は, 大型の子葉と幼根が準備されており, 播種工では施工後当年から発芽し, やや肉厚な子葉を広げた後, 本葉(複葉)が現れる。

また, ヤマハゼ種子の貯蔵性は, 9月から5ヵ月間常温下で貯蔵したところ, 晩夏の高湿条件下でも発芽率が低下しにくいと考えられたが⁴⁾, RSセンターでは定期的に品質検査を実施し, 含水率調整をすることにより7年6ヵ月にわたり, 発芽率を維持したまま貯蔵できている(未発表)。

播種工におけるヤマハゼの平均樹高推移の一例として, 弊社が2月に長崎県でシャリンバイやイロハモミジと混播した切土法面では, 施工7ヵ月後に約10 cm, 約2年後に70 cm, 約4年後以降は上層を優占し, 約6年後に500 cmとなった⁵⁾。約20年後に平均樹高は870 cmとなり, 中には樹高900 cm, 胸高直径15.9 cmの個体も確認された(未発表)。

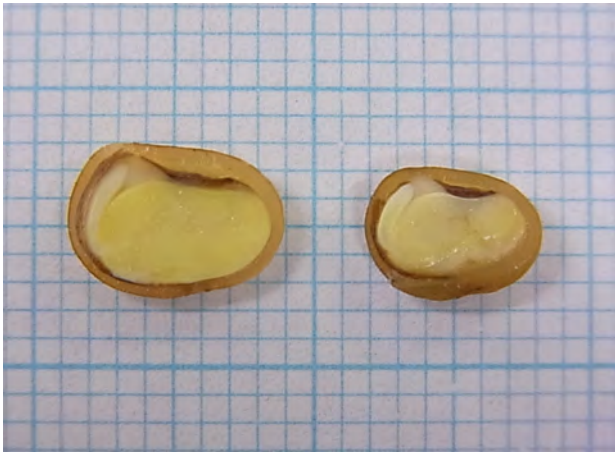
ハゼノキ, ヤマハゼは先駆性樹種で成長が早く耐暑性があり, また紅葉が美しいため, 自然分布域での法面緑化では積極的に採用したい樹種であるが, 樹液にかぶれやすいので場所によっては注意が必要かもしれない。

引用文献

- 1) 長 信也・江刺洋司・吉田 寛(2004)木本植物種子の早期発芽力検定法, 日本緑化工学会誌 30(1), 261-264.
- 2) 勝田 柁・森 徳典・横山敏孝(1998)日本の樹木種子(広葉樹編), 林木育種協会, pp. 222-227.
- 3) 大橋広好ほか編(2016)改訂新版 日本の野生植物3 バラ科~センダン科, 平凡社, p. 283.
- 4) 小野幸菜・吉田 寛(2014)国内産在来木本種子を自然回復緑化で用いる場合の種子貯蔵技術の重要性について, 第45回日本緑化工学会大会研究発表会要旨集, 14.
- 5) 吉田 寛・古田智昭(2004)切土法面における厚層基材吹付工(斜面樹林化工法)による木本植物群落の造成事例, 日本緑化工学会誌 29(4), 482-494.



写真 ハゼノキ(左), ヤマハゼ(右)の果実と種子



種子断面(左:ハゼノキ, 右:ヤマハゼ)。左側に胚軸が見える。



子葉(ハゼノキ)



本葉展開(ハゼノキ)



子葉(ヤマハゼ)



常緑広葉樹と落葉広葉樹の混交林形成を緑化目標とした国内産在来種播種工による法面緑化事例。ヤマハゼが上層を優占し、中層にイロハモミジ、下層にシャリンバイ、ネズミモチが生育している(長崎県・19年8ヵ月後)。